日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ

２０１０年　夏号　No.５９　（2010年8月２５日発行）

発行　日本行動分析学会　理事長　藤　健一
〒540-0021　大阪市中央区大手通2-4-1　リファレンス内
FAX：06-6910-0090（日本行動分析学会事務局と明記）　URL：http://www.j-aba.jp/
E-mail：j-aba.office@j-aba.jp

神戸でお待ちしています…… 第28回年次大会準備委員長・吉野俊彦
第７回(2009年度)学会賞(実践賞)の受賞者決定について…… 研究教育推進委員会
第８回実践賞候補者公募のお知らせ…… 研究教育推進委員会
連載：いま，こんな研究会しています(2)　継続は力なり？　「応用行動分析研究会」を続けて
…… 加藤哲文
連載：いま，こんな研究しています(12) …… 後藤かおり
連載：海外で学ぶ学生，海外で働く専門職 (6)：行動分析学をめぐる冒険…… 是村由佳
自著を語る：発達に障害のある子の「行動問題」解決ケーススタディ……小笠原恵
ABAI2010報告：怒濤のような…… 園山繁樹
ABAI2010体験記(1)：良き出会いと，良きBeerに！…… 沼田恵太郎
ABAI2010体験記(2)：5日間の貴重な体験…… 松下浩之
WCBCT2010参加報告(1)：英語の壁を乗り越えて…… 中島美鈴
WCBCT2010参加報告(2)：今後目指すべき方向性とは …… 木下奈緒子
WCBCT2010参加報告(3)：WCBCT2010発表報告…… 藤田昌也
編集後記……ニューズレター編集部

神戸でお待ちしています

吉野　俊彦
（第28回年次大会準備委員長／神戸親和女子大学）

甲子園の紙袋を下げた親子連れ，真っ黒に日焼けした高校生を数多く見かけた夏も過ぎ去ろうとしています。この夏は神戸でも本当に暑い毎日が続きました。まだまだ先かと思っていた年次大会ももう目の前に

迫っています。

例年 7～9 月に開催されていた年次大会の日程が，諸般の事情で今年度は 10 月 9，10 日と例外的に遅い時期になりました。また，本学でも祝祭日であっても月曜日に通常授業が行われることから，教育セッションを大会会期と別途 11 日(月・祝)の午前中に設定しなければならないなど，会員の皆様にはさまざまなご不便をおかけして申し訳なく思っています。

そのような状況にもかかわらず，自主企画シンポジウムが 3 件，口頭発表が 11 件，そしてポスター発表が 93 件とこれまでの大会に十分比肩する参加のお申し込みをいただくことができました。また予約参加のお申し込み総数も，非会員 23 名を含めて 192 名を数え，懇親会への予約参加者数も 80 名を越えました。

今大会も発達障がい，自閉性障がいに関連したシンポジウム（金子尚弘先生（白梅短期大学），山本淳一先生（慶應義塾大学）の企画）や発表を数多く聞くことができます。応用行動分析学がひとつの大きな柱であることは今回の大会でも言うまでもありません。研究を進める上で忘れることのできない倫理の問題も森山哲美先生（常磐大学・本学会倫理委員長）によるシンポジウムで議論されます。

さらに，今大会のハイライトのひとつである海外研究者招聘講演については，神戸親和女子大学の後援によって，カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校のケーゲル先生が幸いなことにご夫妻で来日していただけることになりました。大会初日のワークショップではリン先生を中心に PRT（機軸行動発達支援法）の実際をお話していただきます。また，教育セッションがある 11 日(月・祝)の午後に，本学心理学科主催の講演会としてロバート先生に学部生を対象とした PRT 入門の講義をしていただきます。大会企画シンポジウムを含めて，これらは一般の方にも公開いたします。

さて，皆さんもご存じのとおり，ロヴァース先生が 8 月 2 日に逝去されました。大会プログラムがタイトな予定となっているために，追悼のための特別プログラムを別途準備することはできませんが，愛弟子のケーゲル先生，中野良顕先生に，ロヴァース先生の思い出を懇親会でお話ししていただけることになりました。

正直なところを申し上げると，ひとつだけ残念なことがありました。それは基礎系の発表数が多くないこと，大会企画として基礎系のものを準備できなかったことです。私自身は臨床心理士の資格を持ち，精神科外来での臨床活動を細々と続けてはいるものの，もともとは動物実験を専門としていた基礎の人間でありながらです。その思いに応えるような 2 つの企画をご紹介させてください。

ひとつは，事務局長の権藤眞織の企画による，トークセッションです。必ずしも基礎系のプログラムではありませんが，大河内浩人先生（大阪教育大学），中島定彦先生（関西学院大学），武藤崇先生（同志社大学）に，これまでの研究歴や自分史についてざっくばらんにお話ししていただきます。とりわけ，これから研究者として育っていこうとする若手の先生方には必聴の，それぞれに異なる大学での体験談や行動分析学に寄せる思い，さらには基礎研究と応用研究の関連性など興味深いトークが展開されるものと期待しています。

もうひとつは，石井拓先生（徳山大学)の企画による，Translational Research のシンポジウムです。本来行動分析学は実験的行動分析・応用行動分析・理論行動分析の 3 つの柱が相互に関わり合いながら発展してきた，基礎と臨床・応用とが密接に関連している数少ない心理学の研究領域です。そのリンクを強める動きとして近年 Translational Research が注目されています。今年の JEAB の 93 巻（5 月）でメイザーをエディターとして特集されたばかりの Translational Research が今年度の大会で自主シンポジウムとして企画されたことを個人的にはとても嬉しく，多くの先生方のご出席をこの場をお借りしてお願いいたします（と書きながら，この裏番組が大会企画シンポジウムなのですが・・・石井先生ごめんなさい)。

この場では，またプログラムでもご紹介できないサプライズをいくつか準備していますので，どうぞお楽しみに。神戸の繁華街から少し離れた鈴蘭台で数多くの先生方にお目にかかれるのを楽しみにしています。

NB 教育セッション・心理学科主催のケーゲル先生の講演会へのお申し込みは 9 月初旬から始めます。詳しくは大会ホームページでご案内いたします。大会プログラムも公開しております。

第７回(2009 年度)学会賞(実践賞)の受賞者決定について

研究教育推進委員会

7月4日の常任理事会の選考委員会において，日本行動分析学会第7回学会賞(実践賞)の受賞者が「NPO法人つみきの会(代表・藤坂龍司氏)」に決定しました。

実践賞は我が国における行動分析学を応用した優れた実践の普及を目的として設置された学会賞であり，「社会的な問題の解決のために行動分析学を活用し実績をあげている個人や組織を，会員・非会員を問わずに対象とする。実績を重視するが，萌芽的な実践も対象とする。」と規定されています。

NPO法人つみきの会(http://www.tsumiki.org/index.html)は，自閉症児・者への応用行動分析に基づいた療育，特にABA早期家庭療育に取り組む親と，それを応援する療育関係者の会です。2000年に兵庫県明石市にてはじまり，2009年現在，全国に7つの支部があり，およそ900名の会員になっています。2年に一度，会員対象アンケート調査を実施し，会の透明性を確保し，改善にも努めています。自閉症療育における応用行動分析の理解・啓発，自閉症のある子どもの親への相互支援を継続的に実施してきた点が評価されました。その療育における具体的な取り組みの一部が「家庭で無理なく楽しくできるコミュニケーション課題30-自閉症の子どものためのABA基本プログラム2-(井上雅彦編著・藤阪龍司著,学研教育出版,2010)」に紹介されています。

なお，授賞式および受賞講演が日本行動分析学会第28回年次大会にて行われます。みなさま，お誘い合わせの上，ぜひご参加下さい。

【授賞式と受賞講演】
日時：2010年10月9日(土) 午後
場所：神戸親和女子大学

第８回実践賞候補者公募のお知らせ

研究教育推進委員会

社会的な課題を解決するために，行動分析学を応用して取り組んでいる個人や組織をご推薦下さい。候補者推薦は，常時，受け付けております。候補者は非会員でもかまいません。これからの活躍が期待できる萌芽的な取り組みも対象となります。推薦の締切は２月末日です。推薦に必要な書式は，学会webサイトからダウンロードできます。

なお，参考までに，歴代の受賞者は以下の通りです。

第１回(2003)：高畑庄蔵氏（富山大学教育学部附属養護学校）
第２回(2004)：野口幸弘氏（大野城すばる園）
第３回(2005)：山崎裕司氏（高知リハビリテーション学院）
第４回(2006)：刎田文記氏（国立職業リハビリテーションセンター）
アニマルファンスィアーズクラブ
京都市立総合支援学校(全7校)
第５回(2007)：受賞者なし
第６回(2008)：武田建氏（関西福祉科学大学）
第７回(2009)：NPO法人つみきの会

学会賞の目的や選考方法などについては，学会webサイトの「学会賞・実践賞規定」をご覧下さい。学会賞に関するお問い合わせは，担当理事（浅野・井澤）までお願いします。

＜連載：いま，こんな研究会しています（2）＞

継続は力なり？　「応用行動分析研究会」を続けて

加藤　哲文
（上越教育大学）

大学院を出てから早数十年がたちました。学生時代から応用行動分析を一緒に学んできた同期生や，先輩，後輩も，全国の大学や研究機関，臨床現場で，仕事の中核を担うようになってきていることと思います。就職をしてしまうと，日々の仕事や学生指導などに追われて，昔の仲間と研究交流をすることが難しくなります。学会で久しぶりにあってもゆっくり時間を取ることもできないことと思います。

そのようなこともあって，約 15 年前から，数人の人たちに声をかけ，応用行動分析をテーマとした研究会をやってきました。

会場は，群馬県草津町にある公立大学セミナーハウスで，応用行動分析による研究や臨床実践に関する研究会を始めたのが始まりです。その後，冬季には，当時，上越教育大学にいらした藤原義博先生の研究室が労をとってくださり，冬の妙高高原で２泊 3 日の研究会も続けてきました。もと同期生や先輩，後輩の方々が，自分の研究室のスタッフやゼミの学生さんを連れて研究会に参加するようになり，最近では，約 50～60 名くらいの大所帯の合宿のような研究会になってきています。

研究会では，院生や学部生の方々が，自分の研究や臨床実践をポスターで発表したり，ミニシンポジウム形式で討論したりしています。また，学生さん達を引率してきている大学の教員も，応用行動分析に関する様々な研究や臨床実践の最前線や動向から，興味のあるテーマをとりだしてシンポジウムを行っています。学会のように限られた時間で緊張した雰囲気での討論とは別に，たいへんリラックスしていて，学生さん達も討論に入りやすい雰囲気での討論になります。もちろん，議論は，夕食後の懇親会にも引き継がれ，朝方までたいへんな盛り上がりを見せています。

今年度は，9 月 12 日から開催予定で，現在までに７大学，約 60 名の参加が予定されています。内容は，学生のポスターと口頭発表，大学教員によるシンポジウムが計画されています。大学関係者でなくても参加は大歓迎です。

来年も開催する予定ですので，興味のある方

は下記のところまで問い合わせてください。　（上越教育大学　村中智彦研究室：E-mail muranaka@juen.ac.jp）

＜連載：いま，こんな研究しています（12）＞

squiggle game の効果の検討
―描画療法の行動分析学的研究を目指して―

後藤　かおり
（常磐大学大学院人間科学研究科）

皆様，こんにちは。常磐大学大学院人間科学研究科で臨床心理学を専攻しております修士課程 2 年の後藤かおりと申します。私は描画療法に興味を持っておりまして，特に，Winnicott（1971）によって開発された squiggle game の構成と，ゲームのやり取りに参加する人たちのコミュニケーション行動との関係を実験的に検討することを研究テーマとしております。研究を開始してからまだ 3 年目というまだまだ未熟者の私ではありますが，今回は私の研究について紹介したいと思います。

さて，squiggle game は何かと申しますと，セラピストとクライエントの 1 対 1 の場面で用いられる描画療法の 1 つです。手続きは，次のとおりです。まずセラピストが走り書きをして（以下，描かれた画を刺激画とします。図 1 左がその例です），子どもはそれを補完するような画（以下，描かれた画を反応画とします。図 1 右が反応画の例です）を描いて，何を描いたのか，その説明をします。その後は，役割を交代して，子どもが刺激画を描き，セラピストが反応画を描いて，その説明をします。このようにして，セラピストとクライエントは，刺激画作成者と反応画作成者の役割を交代しながら，ゲームのやり取りを行っていきます。

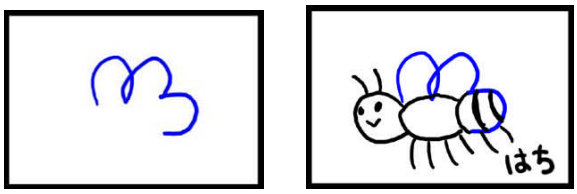


図 1　squiggle game における刺激画と反応画の例（左が刺激画，右が反応画の例）

Winnicott (1971) は，このようなやり取りが繰り返されることで，子どものクライエントとセラピストのコミュニケーションが促進されると主張しました。Ziegler (1976) は，squiggle game によって，子どもとのコミュニケーションが促進された事例を報告しており，さらに，精神病理学的診断のためのアセスメントや治療法としての可能性も指摘しています。

squiggle game は，セラピストとクライエント との間に対等な関係を作りやすく，そのため，子どもに対する心理療法の初期に squiggle game を用いるのが最適であると報告されています（赤岩, 2004）。セラピストとクライエントの双方は，squiggle game によって相手と関わりを持つことができ，それによって彼らは，たがいに良好な関係を形成することができるわけです。田中（1993）は，そのような点で squiggle game が優れた描画法であると述べています。以上の研究報告から，squiggle game は，臨床

場面の初期におけるセラピストとクライエントの間のコミュニケーションの形成に有効であるといえます。

しかし， squiggle game の臨床心理学的効果は報告されていても，squiggle game のどのような側面，あるいはゲーム中に見られるセラピストやクライエントのどのような行動が，クライエントのコミュニケーション行動の促進に関わっているのかを実証的に検討した研究はありません。

そのため私は，1) squiggle game がゲーム参加者のコミュニケーション行動を促すのかどうか，2) ゲームのどのような側面が，参加者のコミュニケーション行動を促すのか，それを実験的行動分析学の方法によって検討することを目的として，研究を進めております。

コミュニケーション行動として，自発的発話と笑い（声を出して口の端を上に吊り上げ，両目を細める），そして 笑顔（声は出さずに口の端を上に吊り上げ，両目を細める）の 3 つの行動を調べています。

以上が，私が行っている研究の概略です。squiggle game と，今まで行われている他の描画療法の効果を実証的に検討することが私の長期的な研究目標です。今後，研究の成果を発表する際には，ご助言をいただけたら幸いです。

＜引用・参考文献＞

赤岩保博（2004). 児童擁護施設における虐待を受けた子どもとの描画臨床. 臨床描画研究, 19, 64-78

小森康永(1992). メタファーとしての動物画――治療システム vs 家族（夫婦）システム――. 臨床描画研究, Ⅶ, 166-183.

Malchiodi, C.A (1998). Understanding children's drawings. New York: Guilford Press.

中井久夫（1977). 相互限界吟味法を加味したスクイッグル法 芸術療法, 13 [中井久夫著作集第 2 巻―治療（1985）岩崎学術出版社, pp236-245.]

Winnicott, D. W. (1971). Therapeutic consultations in child psychiatry. London: Hogarth Press.

Ziegler, R. G. (1976). Winnicott's squiggle game: Its diagnostic and therapeutic usefulness. Art Psychotherapy, 3, 177-185.

田中勝博（1993). スクィグル法の実際. 臨床描画研究, Ⅷ, 29-34.

＜連載：海外で学ぶ学生，海外で働く専門職（6）＞

行動分析学をめぐる冒険

是村　由佳
(University of North Texas)

留学のきっかけ

当時明星大学で山本淳一先生のゼミに所属していた私の留学のきっかけは，1993年に開催された「行動分析学の最前線」という講演会でした。島宗理先生が通訳されていたこと，今でも心に残っています。そこで私は初めてOBM（Organizational Behavior Management：組織行動学）という分野があるのだと知りました。自閉症児の介入ではない応用行動分析に，非常に衝撃を受けました。それと前後して，行動分析の方の集まりに参加させて頂いた際に，杉山尚子先生とお話をする機会がありました。

アメリカに興味があるという話をすると，「それなら大学院に行ったら」とABAIが出していた行動分析が学べる大学のリストを頂き，そこにあった州立大学で，語学学校も併設しているノーステキサス大学(University of North Texas: UNT)に行ってみることにしました。

最初は英語が１年で話せなかったら帰ってこようと思っていました。それがまさか10年以上滞在することになろうとは！

修士課程：OBMのはずが基礎研究！？

UNTには基礎と応用の両トラックがあり，学生はどちらかを選んで履修します。その違いは，応用には実習(practicum)とインターンシップがあり，基礎には Verbal Behaviorのクラスがあるというぐらいのもので，コアの部分はほぼ重複しています。元々OBMを学ぶつもりで留学したので，私は応用トラックを選択しました。しかし応用トラックを選択した筈が，最もコミットして実験したのは Schedule of Reinforcement をAdult Humanでシステマティックなリプリケーションをする，という非常に基礎的なものでした。言語条件付けの研究で知られる Dr. Joel Greenspoon と Dr. Jesus Rosales-Ruiz両教授の研究グループで，FR, FI, Extinction, Consumatory r+ (funny sounds) vs Accumulative r+ (points), Concurrent schedule, contingency-shaped response vs instructed response, schedule sensitivities on instructed response 等の研究をしました。残念ながらABAI等での発表のみで論文にはなっていませんが，応用行動分析に興味がある私にとってこのような基礎研究を通して個体差のあるオペラントレベル，独立変数の操作による従属変数の制御を個体内でしっかり出来た経験は，Tomas F. Gilbert の Human Competence (1978)に書かれているPerformance Matrixの世界観（Teleonomics）の理解に大いに役立ちました。

写真１　Center for Behavior Analysis の頃の入り口

Mentor の Dr. Rosales-Ruiz は，現在は Animal Training関連でご存知の方も多いかもしれません。Karen PryerのClicker EXPOの Faculty や，今年2回目の"Art and Science of Animal Training Conference" を主催した ORCA (Organization for Reinforcement Contingencies with Animals) という学生主導のリサーチグループの顧問でもあります。(http://orgs.unt.edu/orca/)

博士課程：カルチャーショック再び

UNTには行動分析学の博士課程はありません。卒業して10年近く経ちますが，私が修士の頃から「もうすぐ博士課程が出来る」と狼少年のように言われてきましたが，未だに正式な博士課程は出来ていません。私も一度は，修士を出たら就職をしようと考えましたが，卒業直前になって情報科学の学部がInterdisciplinary プログラムの一員として行動分析学に参加を求めていたので，それに乗じて情報科学の博士課程に入ることにしました。もう少しMentorのもとでうろうろしていたかった，ということなのですが，行動分析学はもとより Single-case designをまともに知らない学生と一緒に，

写真２　博士課程卒業式

behavior analysis をbehavioral analysisと呼ぶ教授陣のもとでクラスを履修することとなり，理解の共有やコミュニケーションがとても大変でした。ある意味，渡米したばかりの頃のようなカルチャーショックを受けました。

今ではこの経験は非常に貴重なものと考えています。なぜなら行動分析学は，色々な分野にまたがりますし，それらの分野はすなわちそれぞれ固有の価値観を持った文化だからです。幸い情報科学学部にも行動分析学に理解を示す教授がおり，行動分析と情報科学を融合した博士論文を書くことが出来ました。行動分析学的「パフォーマンス」は，「図書館」をパフォーマンスの見地から包括的に検討することが出来ました。Dr. Brian O'Connor には，彼のmentorである図書館学の哲学者，Patrick WilsonとGilbertの共通性を理解いただけました。

もう一つ博士課程の中で得た貴重な経験は，Ogden Lindsley先生の弟子のBeatrice Barrett先生 のSIDAD (Simultaneous Discrimination and Differentiation) 研究の保存プロジェクトに参加したことです。１セッションに６種類のグラフを累積グラフに表し，それにセッションの記録カードを加え計７アイテムを，多い被験者は1000セッション近く，参加した被験者は100名余，と膨大な量の紙データを体系的にデジタル化しました。

架け橋になりたいです

博士号を取得し，行動分析学部のDr. Rosales-Ruizの下でポスドクをすることになりました。図書館をパフォーマンスの見地より検討した博論の延長で，情報科学の「情報」とは何なのかを，パフォーマンスの見地より検討することがテーマです。

・・・・・・が，実は現在は，慶応義塾大学で山本淳一先生の研究室のお手伝いをしております。研究室が機能化するためのパフォーマンス分析をしております。また，NPO法人相談と教育支援室（COESルーム）において，「マネージメントスーパーバイザー」をさせて頂いております。またORCAとの関わりがあることから，杉山尚子先生に日本のDog Trainingに触れる機会を頂きました。いつも色々な機会を頂き感謝です。ビザが整えば，残りのポスドクの期間を過ごすべく渡米します。

写真３　夏学期に行動分析を UNT で学んだ第１回メンバー

アメリカでの経験は日本に還元したいという気持ちが強いです。日米の架け橋になるよう，微力ながらお役に立てたら幸いです。ご意見ご質問ございましたら yuka.koremura@gmail.comまでお願いします。

＜自著を語る＞

発達に障害のある子の「行動問題」解決ケーススタディ
―やさしく学べる応用行動分析―

小笠原　恵
（東京学芸大学）

山口：先生のご本が出版されましたね。どんな反応がありましたか？

ババ先生：随伴性を中心に書かれた本であることをブログで紹介してくださった方がいらして，とてもうれしく思いましたよ。

山口：そういえば，タイトルを決めるときに，とても盛り上がったみたいですね。

ババ先生：執筆者でブレインストーミングをして，それでもしっくりこなくて，夜中 12 時過ぎまでメールでやり取りをしましたね。ただ，執筆者の中では「なぜだろうから考えよう！」というテーマは共通していましたよ。結局タイトルになりませんでしたが。

山口：ああ，それで，随伴性を中心に，と紹介されて先生はうれしかったのですね。

ババ先生：その通りです。「応用行動分析？飴と鞭だろう？」と揶揄されたり，「事例研究？その汎用性は？」と判で押されたように質問されることにうんざりしていましたからね。

山口：そういえば，先生は初校の段階で「強化子」についても書かれていなかったとか。

ババ先生：抜け落ちてしまったのです。副題に応用行動分析が学べるとあるにもかかわらず，それはないかな，と。あと，こんな反応もありました。アセスメントの後，どんな支援方法を使うのか，ということをどう決めるのか？という質問です。私は，「なぜ」がわかれば，対応した方法を考えることはそれほど難しくない，と思いあがっていたために，これはカウンターパンチでした。そして，「なぜ」を紐解いた後の支援へのつなげ方をもっと丁寧に伝えることが必要だ，と今は思っています。

山口：ご本を書かれるときに，苦労されたことはどんなことですか？

ババ先生：この本を作っていくのはとても楽しかったですよ。もともと，あるシンポジウムで話したことをきっかけに中央法規出版の渡辺さんと國保さんから家庭支援の本を書いてほしい，と声をかけられたのですよ。その日，学生さん達と居酒屋さんで構想を練りました。といってもアルコールの力も加わり，あっという間に，「ケーススタディ」，「読者が相談者の感覚になれるような」，「ワークシート」，「イラスト入りで」といった骨格となる本のイメージができあがりました。できあがった本をみると，ずいぶんお二人の最初の構想と離れてしまったのではないだろうか，と思います。苦労したのは，，，そう。複数で書いたので，私やコラムに登場するトシくんは多重人格にされてしまいましたから，それを書き直すのはなかなか手間でしたよ。まだ，統一されていないところや矛盾が残っていますが。

山口：この本で，先生のねらいとされたところはどんなところでしょうか？

ババ先生：応用行動分析学を全く知らない人が，マスリラさんの素敵なイラストにひかれて，この本を手に取ってくれたときに，ああ，こ

うやるとあの子へのアプローチがうまくいくのかもと感じてもらえたら何よりです。そのうえで,「へー，これって応用行動分析学っていうの？」と興味をもってもらえるといいな，と思っています。

（中央法規出版，￥2,100）

＜ABAI2010参加報告＞

怒濤のような

園山　繁樹
（広報委員会／筑波大学）

今期の理事会では，広報委員会が国際担当も兼ねることになりましたので, 去る 5 月 28 日から 6 月 1 日まで，米国テキサス州サンアントニオの Henry B. Gonzalez コンベンションセンターを主会場に開催された ABAI 第 36 回年次大会について，前国際担当理事の杉山尚子先生に代わって，園山が報告します。ABAI での国際担当の仕事としては，ABAI Expo での J-ABA の紹介が一番，と考えていましたが･･･。

「怒濤のような」一週間は，日本を発つ 3 日前，5 月 25 日午前 7 時 37 分の緊急メールに始まります。早朝，マリア･マロット先生より杉山先生に電話があり，29 日朝に開催される Chapter Leadership Training で，大きな組織を持つ Chapter として, J-ABA の発展過程について 15 分のプレゼンをするよう依頼があったのでした。そして,「現在の国際担当は先生ですから」と。しかし「急に言われても･･･」というのが，私の正直な反応でしたが，杉山先生曰く「ABAI ではこんなことはよくあること。兎に角，英語の原稿を作ってプレゼンするしかありません！」。英語に堪能であれば難しいことではないかもしれませんが，英語表現アレルギーの私にとってはそうはいきません。授業以外の時間，準備に専念することになりました。

「参考になる資料が手元にある」と，早速，杉山先生からパワーポイントファイルをいただきました。それは杉山先生が，ABAI の delegation で中国を訪問され， 瀋陽・長春・北京の 3 箇所でシンポジウムをされたときのものでした。（ちなみに，一行は，杉山先生の他，当時の会長 Jack Marr, Linda Hayes, Maria Malott, Joe Morrow 他で，ABAI Newsletters Vol.25(2),6-8,2002 に， China: Land of Opportunity for Behavior Analysis の記事で，写真付きで紹介されています。http://www.abainternational.org/aba/newsletter/vol252.pdf）。

すでにこれまでの日本における行動分析学の発展過程が的確にまとめられており，それに最近の状況を加筆する形で，パワーポイントは完成しました。後はスピーチ用の原稿です。米国在住の日本人で BCBA 有資格者の知人に急遽お願いし，28 日夜に最終原稿が出来上がりました。

29 日は午前 8 時 30 分開始で（遅刻しないようほとんど不眠でした），現会長の Raymond Miltenberger，担当の Maria Malott をはじめ，各 Chapter の代表者が集まり（計 40 人くらい。日本からは私と杉山先生），次のような内容で，11 時まで 2 時間半にわたって開催されました。

まず, 座長の Gordon Bourland から Chapter 全体の概観報告がありました。それによると，現在，米国内に 37，海外に 31 の Chapter があるとのことです。海外の Chapter の会員数では，

ブラジル 1,800 名，オーストラリア 1,500 名，そして日本が 883 名と多く，今回の海外からの参加は日本，香港，イタリア，スペイン，コロンビアの 4 ヵ国でした。会長の Miltenberger から今後の方向性についての説明があった後，類似した Chapter 同士で 4 つのグループに分かれ，それぞれの現状や課題について 30 分ほど協議しました。海外 4 ヵ国のグループでは，コロンビアとイタリアは組織ができたばかりであること，香港代表からは組織の拡大方法などの報告があり，杉山先生からは日本の過去・現状が報告されました。グループ討議の後，組織の大きさが異なる 3 つの Chapter の過去と現状のプレゼンがあり，その最後が J-ABA でした。学会創設の経緯，専門書の翻訳，米国研究者の招聘，現在の学会組織とその活動内容などを報告しました。と，無事，任務を終えることができました（個人的には，Miltenberger の翻訳の紹介がご本人の前でできて何よりでした）。

さて，その日は，午後の指導学生のポスター発表に続いて，夜 8 時半から Expo です（ポスターは計 124）。J-ABA のポスターも，杉山先生から前年分を引き継ぎ，最新情報を加筆しました。また「必ず日本酒を持参してください。海外の研究者が楽しみしています！」という厳命があり，今回は筑波大学ブランドの「桐の華」を持って行きました。

私たちがまだポスターを貼っている最中に，一番最初に来られたのは佐藤方哉先生でした。先生の ABAI への思いが伝わってきました。その後，カタニア先生，ヒュワード先生，シュリンガー先生をはじめ多くの外国研究者，日本の研究者（佐藤先生，中野先生，森山先生，大河内先生，島田先生，山岸先生，奥田先生，石井先生他），在米の日本人学生，常磐大学，関西学院大学，筑波大学他の学生等が集まり，夜半の終了時間まで賑やかに情報交換が行われました（写真 1）。隣は台湾とブラジルのポスターでした。（余談ですが，ある外国人研究者が会場に訪ねて来て，「朝のプレゼンはとてもよかった」とわざわざ伝えに来てくれたことは，大きな強化でした）

写真１　Expo のポスター前で

その際，例年のように（これも杉山先生の発案ですが），在米の日本人学生に対する日本語図書の贈呈を行いました（写真 2）。ご寄贈くださいました小野先生，杉山先生，奥田先生，ありがとうございました。学生の皆さんに大変喜んでいただきました。

写真２　日本語図書の贈呈

5 月 31 日の夜には，恒例の Local Beer SIG が醸造所パブ Blue Star にて開催され，在米日本人学生・専門職，日本の研究者・学生との交流がなされました。この LBS も杉山先生の発案で，数年前から始まり，昨年からは Local Beer SIG と呼称されるようになりました（LBS の事始めは，J-ABA ニューズ，No.54 に紹介されています）。

今年は参加人数が増え，大変盛大な会になりました。日米在住の学生同士の交流はもちろん，

私にとっても米国の実情を窺い知ることのできる貴重な機会でした。幹事の杉山先生，黒田さんを始め，ご準備いただいた方々に御礼申し上げます。この会の様子については，次号（秋号）で改めて紹介する予定です。

＜ABAI2010体験記（1）＞

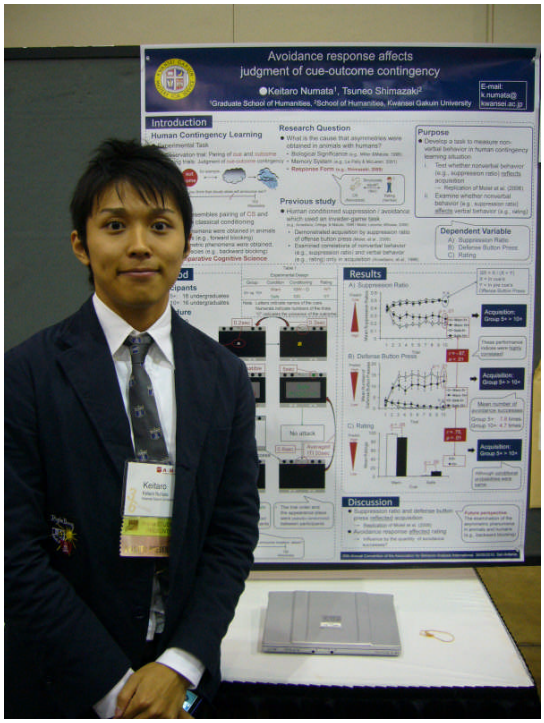
良き出会いと，良き Beer に！

沼田　恵太郎
（関西学院大学大学院文学研究科総合心理科学専攻）

日本行動分析学会から「日本在住学生会員の ABA/SQAB の参加に対する助成」を受け，今年 5 月 28 日から 6 月 1 日にかけて開催された第 36 回国際行動分析学会（ABAI）に参加してきました。開催地となったサンアントニオは，メキシコと国境を接しているテキサス州の南部に位置しており，アラモ砦やリバー・ウォークを有する全米有数の観光都市でもあります。抜けるような青空にジリジリとした陽気も特徴的で，空港に降り立ってすぐに，「ここで行われる ABAI は，絶対楽しいはず！」と期待で胸が膨らんだのを覚えています。

ABAI への参加は，今回が初めてでした。それまでにも 3 回ほど国際学会には参加していましたが，いずれの大会もヨーロッパでの開催で，アメリカ本土への上陸も初めてでした。何もかもが初めての連続ではありましたが，それ故に「驚き」も多く，想像していた以上に実りのある時間を過ごすことができたように感じています。以下に，私が経験した ABAI 体験を一部ですが簡単にご紹介したいと思います。

はじめに驚いたのは，大会プログラムを手にしたときでした。A5 サイズ 452 頁から構成されたプログラムには，1200 件を超える発表題目がギュッと収められており，改めて ABAI の規模の大きさを感じとることができました。しかし，その反面プログラムの中から自身の予定を組むのは容易ではなく，アメリカ行きの飛行機の中ではどのセッションに参加するかということの思案に明け暮れました。同じ時間帯に聴きたい発表が重なることも珍しくなく，そのときは本当に頭を抱えました。このような葛藤は本当に贅沢もので，これも ABAI のプログラムが充実している証拠なのだと思います。今回は自身の研究領域に近いものだけでなく，できるだけ様々な領域の発表を聴きに行くようにしました。



次に驚いたのは，本や論文の中でしか出会えない憧れの研究者の講演を，「生」で聴けるということでした。私の関心が主に実験的行動分析にあることも手伝ってか，プログラムを開くたびに Murray Sidman 先生, A. Charles Catania 先生，William M. Baum 先生といった著名な先生の名前が目に飛び込んできます。今回の大会では Catania 先生の“Behavior analysis as a biological science”と，Baum 先生の“Rethinking reinforcement: Allocation, induction, and correlation”を拝聴することができ，これからの実験的行動分析の広がりを感じ取ることができました。その影響もあってか，学会場にある本屋ブースを横切るたびに先生方の本が欲しくなり，最終的には Catania 先生の“Learning”と Baum 先生の“Understanding behaviorism”を購入して，サインをおねだりしに走りました。

そして何よりも驚いたのは，ポスター会場で行われていた議論の熱気と，参加していた人々の多様さでした。小学校にある体育館の倍はあろうかというサイズのポスター会場には，その側面にそってポスター発表用のボードがズラッと並べられており，それらの前で複数の人々が議論している光景は，なんとも言えず迫力がありました。私のポスター発表はヒトの回避学習に関するもので，実験的行動分析（EAB）のセクションで 30 日に行いました。発表のタイトルは“Avoidance response affects judgment of cue-outcome contingency”というもので，指導教授である嶋崎恒雄先生との共同発表でした。「ひょっとしたら誰も来てくれないのではないか？」という不安もありましたが，発表の本番では ABAI に参加されていた日本の先生方や，海外の先生方が発表を見に来てくださいました。先生方からいただいたご指摘は，これまで連合主義的にヒトの学習を捉えてきた私にとってはとても刺激的で，今後の研究を進めていく上での大きな活力となりました。

また，刺激的という意味では，ABAI Expo と Local Beer SIG への参加も忘れられません。29 日の夜に開かれた ABAI Expo では，ポスター発表と同じように様々な大学や各国の行動分析学会，あるいは研究グループなどがブースを設け，積極的な情報交換が行われていました。日本行動分析学会のブースの前には，日本の大学院で行動分析を勉強されている方はもちろん，アメリカの大学院で行動分析を勉強されている方もいらっしゃり，それぞれの大学院にあるプログラムの違いや留学の話などについても情報を得ることができました。研究発表や講演だけでなく，このようなイベントが容易されているのも ABAI ならではだと思います。また，31 日の夜に開かれた Local Beer SIG では，Expo で知り合った学生の方や先生方をはじめ，アメリカで実際に働かれている行動分析家の方もいらっしゃり，それぞれ地ビールを片手にネットワーク作りをされていました。ここでは日本にいては得られなかったであろう新たな出会いと，「これって本当にビールなの？」と思わず疑ってしまうほど素晴らしい地ビールの味を大いに楽しみました。

いささか散文的かも知れませんが，以上が私の ABAI 体験記になります。最後になりましたが，日本行動分析学会の助成をいただき，このように貴重で有意義な体験をさせていただいたことを心より感謝いたします。ありがとうございました。

＜ABAI2010体験記（2）＞

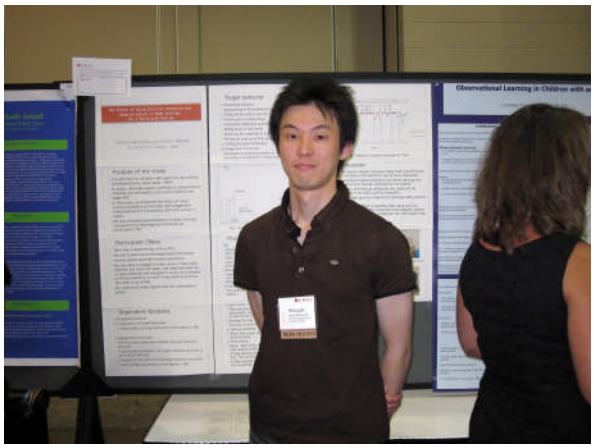
５日間の貴重な体験

松下　浩之
（筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻）

5 月 28 日から 6 月 1 日まで，アメリカの San Antonio で開催された，第 36 回国際行動分析学会（ABAI）に参加してきました。今回の ABAI への参加は，2007 年の San Diego 以来 3 年ぶり 2 回目でしたので，前回の経験を生かして，「なんとかなるだろう」と根拠のない自信を持って，「ディスカッションを楽しもう」などと意気込んで渡米しました。

会場から少し離れたホテルからの道すがら，同期の友人と 2 人で記念撮影などしながら，観光気分で学会会場の”Henry B. Gonzalez Convention Center”に着くと，とにかく会場が広い！まず受付がわかりません。メキシカンな係員の案内を聞き取るのも，2 人がかりでやっとという状態でした。また，プログラムも同時進行でたくさんあるので，どこで何をやっているのか把握するのが大変です。しかし今回は（前回もそうだったのかもしれませんが），大会サイトからオンラインで自分のスケジュールを管理することができ，本当に助かりました。これは日本の大きな学会でも採用してほしいと思いました。

私が発表した研究は，”The effect of using activity schedules and generalization in home settings for a child with autism”という題目で，「活動スケジュール」を用いることで自閉症児の活動遂行を円滑にし，家庭場面における有効性を検討したものです。国内の学会ではあまり発表されていないテーマですが，ABAI は発表総数が多く，活動スケジュールに関する研究も，シンポジウム，ポスター発表ともにいくつかなされていて，とても勉強になりました。私のポスターの前にも何人もの方が集まってくださり，準備したハンドアウトも持っていってもらえました。しかし，意気込んでいたディスカッションが大誤算でした。優しそうな青年やマダム，若い女性など，何人も声をかけてくださったのですが，こちらの説明はいつもアタフタしてしまい，楽しい議論どころではありませんでした。後半から終盤にかけては，なんとか落ち着いて対応できましたが，やはり国内の学会以上に入念な準備が必要だということを，身をもって経験しました。



ところで，ポスター発表の終盤で，私のポスターを熱心に見てくれる紳士がいました。その紳士は，じっくり見てからゆっくり私に近づき，この研究テーマを選んだ理由や，参加児の様子を詳しく質問した後，この研究の良い点や改善点など，実に細かく丁寧にコメントをしてくださりました。私は英語を聞きとるのに必死で，名前を聞いてもボーっとしていましたが，その紳士が笑顔で立ち去ってから考えてみると，そ

れは元 ABAI 会長の，Ed. Morris 博士だったのです。そういえば名札に色とりどりの勲章のようなシール（？）が貼ってありました。もっと早くに気づいていれば写真でもお願いできたのに・・・と今では後悔するのみです。後で指導教員の園山繁樹先生にその話をしましたが，あまり信じてもらえず,「その話が本当だったら僕も写真を撮って欲しかったのに」とのことでした。

その日の夜 8 時半からは ABAI EXPO という，各支部の交流会のようなもの（？）に参加しました。参加者はビールやワインを片手に他の支部のブースを行き来しながら談笑していました。私は園山先生に，California State University の H.D.Schlinger 博士を紹介していただきました。Schlinger 博士は，私が何度も読んで勉強した訳本の原著者で，直接お会いできたことは大変光栄で，感動しました。このように我々日本の学生にとって，本や論文の中でしか知らない研究者に“生で”会えることは, ABAI に参加することの最大の意義なのかもしれません。他にも多くの研究者の研究を身近に感じることができたことや，杉山先生に誘っていただいた Local Bear SIG（地ビールツアー）も，おいしいビールと杉山先生によるビール講習をいただけただけでなく，在米学生の方の貴重な話が聞けたことなど，良かったことを挙げるとキリがありません。日本での日常とは違い,「祭り」に参加したような感覚でしたが，自分の研究にとっても良い刺激となり, 長時間飛行機に乗ってでも「また行きたい」と思えるような素晴らしい 5 日間でした。

今回は日本行動分析学会から「日本在住学生会員の ABA/SQAB 参加に対する助成」をいただき，ABAI に参加することができました。最後になりましたが，このような貴重な経験ができる機会を与えてくださったことに感謝いたします。本当にありがとうございました。

2011 年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業」

広報委員会

学生会員の皆さん。2011 年 5 月に米国デンバーで開催される ABAI または SQAB に発表を申込み，受理された方で，口頭発表，ポスター発表，シンポジウムのスピーカー，パネルディスカッションのスピーカーになられる方は，ご検討ください。

※ 応募要項，応募用紙等は，学会ホームページをご覧ください。

※ 応募締め切り　　2011 年 3 月 31 日消印有効

＜WCBCT2010参加報告（1）＞

英語の壁を乗り越えて

中島　美鈴
（東京大学駒場学生相談所，現 福岡大学人文学部教育・臨床心理学科）

2010 年 6 月 2 日から 4 日間にわたり，ボストンで開かれた WCBCT（世界認知行動療法会議）に参加しました。実はこれは私にとって初めての国際学会であり，初めての単独海外旅行となりました。英語が非常に苦手な私は（おそらく参加者の中で最も苦手だったと自負しています），学会申し込みすら苦戦し，飛行機に無事乗れるだろうか，乗り継ぎはできるだろうか，ホテルまでどうやっていこうかなど，学会にたどり着くまでに多くの難関がありました。ここに”英語が苦手な人でもなんとかなる体験記”を記したいと思います。

臨床の仕事に追われながら，国際学会準備をするのは至難の業です。限られた時間で分かりやすいポスターを作って英語で説明する練習をしなければなりません。私は Skype を使った個人英会話レッスンを毎日 25 分ずつ続けました。心理学専攻の英会話講師に何度も何度もポスター発表の質疑応答の練習をしてもらったり，ポスターの添削を受けたりしました。これは大変有効な方法でした。また，空港やレストランやホテルで想定される会話についても何度もロールプレイを行なって備えました。

いよいよ大会前日のワークショップ。私は Young 先生のスキーマ療法に関するワークショップに参加しました。日本人はなんと 5 人も参加していました。先生がゆっくりはっきり話されるので，ずいぶん聞き取りやすかったことや，Power Point で示されるので理解しやすく助かりました。しかし口頭で補足されているらしい微妙なニュアンスまではわかりませんでした。そこで，休み時間に最前列に座って積極的に質問していた参加者の隣に移動して，私は英語の聞き取りが苦手なので横から彼女のノートを見てもよいかと頼んでみました。オーストラリアから来た情熱的で親切な彼女はすぐに OK してくれて休み時間には簡単な英語に置き換えながら授業の内容を教えてくれました。これは大変助かりました。

私のポスター発表には，数名の方が聞きに来て下さいました。内容について驚くほどストレートに褒めてくれたり，建設的な意見をくれたりと，和やかな雰囲気でした。中にはオンラインジャーナルの編集長の方も来られて，投稿を薦められたりもしました。チャンスはどこにあるかわからないものです。

シンポジウムやオープンペーパーでは，国内の学会ではなかなか聞けないような最新の，もしくは非常に特化した分野の話題について聞くことができました。中でもインターネットを用いた CBT や，transdiagnostic approach による CBT 研究，悲嘆に関する CBT などはとても興味深い話題でした。また，”CBT の基本的なアプローチがうまくいかなかったときにどうするか”というジュディス・ベックのワークショップは即臨床に役立つ具体的なノウハウを身に付けることができるようでした。しかし，口頭での補足が多かったため残念ながら私には聞き取ることができず理解が追いつきませんでした。臨床的な技法を学ぶ講座よりは，研究発表の方が，用いられる単語数が少なく決まったフォーマットで話が進められるため聞き取りやすいようで

す。ですから，臨床的な技法を学ぶためには，IC レコーダー，デジタルカメラ，電子辞書は国際学会の三種の神器だなと思いました。もしくはあらかじめ受講する講師の著書の翻訳本を読んでおくのも手だと思います。

どのプログラムも素晴らしく観光する間も惜しんでしっかり参加しました。今後の臨床や研究活動に大きな刺激をいただくことができました。苦手だった英語にもチャレンジして，今後も海外の学会に出向いたり，英語で論文投稿をしてみたいと思います。最後になりましたが，このような素晴らしい機会を資金面から援助してくださった WCBCT2004 記念若手研究奨励基金に感謝を申し上げます。

＜WCBCT2010参加報告（2）＞

今後目指すべき方向性とは

木下　奈緒子
（早稲田大学大学院人間科学研究科，現 同志社大学大学院心理学研究科）

WCBCT への参加は, 今回が初めてであった。前回スペインで開催された WCBCT に参加した学生からは，WCBCT の盛り上がりはまるでお祭りのようであったと聞いていた。しかしながら，今大会に参加してそのような印象は受けなかった。開催地であった大学の施設上の都合により，各会場が離れていたことから，参加者が多数の会場に分散していたことがその背景にはあるのではないかと思う。

今回 WCBCT に参加した目的は，最新の研究知見に関する熱いディスカッションに触れること，そして，著名な研究者や臨床家が集まる本大会で自身の研究発表を行うことであった。先述したとおり，参加者が多数の会場に分散していたため，前大会のようなお祭り的盛り上がりは体験できなかった。しかしながら，参加したシンポジウムの参加者が比較的少人数であったために, 濃いディスカッションが展開されたり，フロアーと発表者のやり取りが活発に行われたりということを目にすることができたことは，私にとって貴重な体験となった。初日に参加した Clinical Roundtable Discussion“Standard and Poststandard Cognitive Psychotherapies”では，人間の認知についてどのように捉えアプローチするかについて，認知的アプローチを主張する研究者と行動分析的アプローチを主張する研究の間でディスカッションが行われた。終了時間が超えてまで続いた熱いディスカッションに感動し，本大会の参加目的の１つは達成されたと感じた。

ポスター発表の時間帯がお昼前であったこともあり, 会場は, 多くの参加者で賑わっていた。多くの国内外の研究者や大学院生が，ポスターを見に来てくれたことにとても感動した。中でも，同じ研究テーマのもと研究を進めている国外の研究者に出会えたことはとても良い経験となった。帰国後も連絡を取り，互いの研究発表資料を送付したり，意見交換が続いている。今年度 11 月に開催される Association for Behavioral and Cognitive Therapies（ABCT）の年次大会に参加を予定しているが，彼女も ABCT に参加する予定とのことで，半年後に最新知見の共有とディスカッションをする約束をしている。また，臨床の現場で実践を積んでいる臨床家の方からいただいたコメントも大変興味深いものであった。今後も，実際の臨床現場

で必要とされる知見との乖離なき基礎研究を進めていきたいと思った。

博士後期課程に進学してから，今回が初めての学会参加であった。若い学生が同様の研究テーマに興味を持ち，多くの質問をしてくれたことを大変嬉しく思った。自身の研究テーマに関連する最新知見を把握し，臨床応用につながるクリエイティブな基礎研究を進めていくことはもちろんのこと，それらをいかに分かり易く若い学生に伝えていくかといことが重要であると感じた。目の前の研究にひたすら取り組んでいた修士課程のころとは，異なる視点が自分の中にあることを実感した。

＜WCBCT2010参加報告（3）＞

WCBCT2010 発表報告

藤田昌也
（関西学院大学文学研究科・重症心身障害児施設すくよか）

2010 年 6 月 2 日から 5 日にかけて，ボストン大学で開催された World Congress of Behavioral and Cognitive therapies (WCBCT) でのポスター発表の概要と各種プログラムに参加した様子を報告させていただきます。日本行動分析学会から「WCBCT2004 記念若手研究奨励基金」を受け発表させていただきました。大変ありがとうございました。

WCBCT でのポスター発表は 2004 年の神戸での発表から 2 回目であり，「Teaching clock time reading skills for an autistic woman with severe intellectual disability」を発表しました。28 年間施設に入所している 41 歳の最重度知的障害を伴う自閉症成人女性に対して，時計の 1 時間単位の読みと時系列の順序を応用行動分析の諸技法を用いて訓練した事例報告になります。アセスメントでは 7 以上の数字を読むことができなかった対象者に対して課題分析に基づき段階的に指導を進めることにより，実物の時計の 1 時間単位の読みと時系列の順序の正答率をほぼ 100%まで向上することができました。成人の発達障害者，特に最重度知的障害のある人に対する介入研究は少なく，今後も継続して取り組んでいきたい研究領域です。

ポスターは 21 の分野に分かれており，私は Developmental Disabilities (Intellectual Disabilities, Cognitive Rehab)のセクションでの発表でした。直前に San Antonio で ABAI が開催されたためか同セクションのポスター数は 8 件であり，発達障害のセクション全体への訪問者も少なかったことが残念でした。

その他数多くのプログラムの中から，私は発達障害や子どもを対象としたプログラムを中心に参加しました。発達障害の分野では，問題行動の改善やスキル訓練の研究は少なく，発達障害児・者のストレスや不安といった心因的問題を扱う研究が中心でした(OP1: Developmental Disabilities (Intellectual Disabilities, Cognitive Rehab) など)。これは 2004 年の WCBCT から大きく変化した点であり，大変示唆を得ることができました。子どもを対象とした研究では，「S70: Gearing CBT for Anxiety to Very Young Children: Examples of Developmentally Adapted Protocols」などでは，介入の工夫や注意点が具体的に報告されていたため，臨床活動に役立てていくことができると

思います。また，各国から大きなプロジェクトの一環として発表される研究報告が多く，日本の研究との違いを感じました。

今回の WCBCT では，専門分野や関連分野における最新の研究動向を知ることができ，大変刺激を得ることができました。貴重な体験を支援していただいた日本行動分析学会に大変感謝しています。ありがとうございました。

新「卒論・修論データベース」への登録を

研究教育推進委員会

＜登録方法＞

1）学会ホームページから「卒論・修論データベース」のページに行きます。
（http://j-aba.jp/s_data/）

2）インデックス［新規データ登録］をクリックします。

3）必要事項に記入します（※なお，著者のところに名前を記入する場合，著者本人の了解を得るようにしてください）。

4）最後に，登録者用の修正・削除用の PASS（半角英数字 8 文字まで）を入力後，［送信］をクリックします。

5）管理者が確認した後で公開します（ご協力ありがとうございます）。

編集後記

記録的な猛暑が続いているこの夏ですが，会員の皆様にはお元気でお過ごしでしょうか。この夏号は特に海外での国際学会，ABAI と WCBCT の参加報告を多く掲載しました。WCBCT（世界認知行動療法会議）は 3 年に 1 度開催され，前々回（2004 年）は神戸で開催されました。その時に若手研究者派遣の基金が日本認知療法学会，日本行動療法学会，本学会の 3 学会で創設され，2007 年（バルセロナ）と 2010 年（ボストン）の WCBCT への参加助成が行われました。今回で助成が終了しますので，助成を受けられた 3 名の方にご寄稿いただきました。サンアントニオでの ABAI 参加助成を受けられた 2 名の方にも報告をしていただきました。その中で触れられている Local Beer SIG については，次号でご紹介します。

いよいよ 10 月 9-10 日に第 28 回年次大会が神戸親和女子大学で開催されます。今回は昨年のような新型等インフルエンザの影響もなく何よりです。これまでになく大変充実したプログラムが準備されていますので，奮ってのご参加をお待ちしています。（園山）

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- ニューズレターに掲載する様々な記事を，会員の皆様から募集しています。書評，研究室紹介，施設・組織紹介，用語についての意見，求人情報，イベントや企画の案内などです。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて，下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については，編集部において決定します。
- ニューズレターに掲載された記事の著作権は，日本行動分析学会に帰属し，日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
- 記事を投稿される場合は，公開を前提に，個人情報等の取扱に，十分ご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学障害科学系園山研究室気付
日本行動分析学会ニューズレター編集部
園山　繁樹
E-mail: sonoyama@human.tsukuba.ac.jp